

渡部昇一

日本の歴史

7

戦後篇

戦後混乱の 時代に

日本人のための日本の歴史

こんな歴史を待っていた!
とにかく、わかりやすい!

歴史の見方が変わる!

渡部昇一「日本の歴史」 第一回配本

WAC

「主権のない時代に憲法ができるわけがない」

戦後を特徴づけた最大のマイナス要因が占領政策、なかでも公職追放令だとしたら、一般にプラス要因とされているのが新憲法（日本国憲法）だろう。

新憲法は、日本の新しい出発と平和の象徴として扱われてきた。特に第九条は神聖視され、もはや宗教の段階にまで高められているのが現状である。特に第九条は神聖視され、連合軍による日本の占領はポツダム宣言受諾によって始まった。

ポツダム宣言を受諾するにあたって日本は、国体が維持されるかどうかをたしかめるために連合軍に問い合わせている。つまり天皇陛下をどうするかということだが、その時、連合国側は、天皇は連合国軍総司令官に「subject to」と答えた。直訳すると「天皇は隷属する」ということだ。これを聞いた日本は、「隷属するなら廃止されるわけではない」のだと解釈し、ポツダム宣言を受諾したのである。

ポツダム宣言受諾の決断は、明治憲法第十三条にある「天皇ハ戦ヲ宣シ和ヲ講シ及諸般ノ条約ヲ締結ス」という「天皇の外交大権」によるものだ。しかし、占領されると天皇は「subject to」だから、占領軍の下に置かれることになった。

したがって、当然ながら占領下の日本には主権がなかった。一番わかりやすい例を引け

ば、憲法は主権の発動によるものだと言うが、新憲法が発令された後でも、日本国内で日本の刑法によらずに死刑が執行された。東京裁判である。

日本の新憲法が主権の発動でないことを、これほどわかりやすく示したものはない。憲法の上にもう一つ憲法があるなどあり得ないことだ。すなわち新憲法はふつうの憲法ではないということを理解することから始めなければいけない。

日本の憲法学者はさまざまなことを言うが、「主権のない時代に主権の発動たる憲法ができるわけがないではないか」というのが、一番まっとうな憲法に対する考え方だと私は思う。

では、日本国憲法とはいったい何なのか。

占領軍は直接軍事占領を行う予定でいたが、重光葵^{まもる}外務大臣の努力によって間接統治になった。日本政府の上に占領軍があり、占領軍は日本政府を通じて日本国を統治するという図式だ。

日本国憲法は、この図式の中で占領軍が日本支配を都合よく行うための「占領政策基本法」だったのである。

これに対して今の護憲学者は、日本国憲法には天皇陛下のまえがき^{じょうめ}（上諭）もついたり、議会でも議論したことになっている、枢密院^{すうみつゐん}でも精査したことになっているではないか、と言う。

しかし、大学で憲法を教えているような憲法学者の言うことには聞く耳を持たないほうがいい。なぜなら、憲法というのはすでに存在するもので、憲法学を教えるということは今ある憲法を解釈して飯を食うということだからである。その憲法を「憲法でない」などと言ったら飯が食えなくなる。

そもそも、憲法ではない日本国憲法を憲法だと言った親玉は、占領下における東京大学法学部教授であった宮沢俊義氏^{としよし}や横田喜三郎氏^{きさぶろう}である。今から見れば売国的な憲法学者だと言える。

その弟子たちが恩師に憲法学の席を譲ってもらって、「日本国憲法は憲法ではない」などと言うわけがない。だから今の、特に東大から派生した憲法学者の意見など参考になるはずがないのである。

新憲法は失効させるべし

では、護憲学者が主張する日本国憲法の正統性についてはどう考えればよいか。憲法学者の中でおそらく唯一、大学を出ていない南出喜久治^{みなみできくじ}弁護士^{きくじ}の意見が一番、筋が通っていると思う。

ポツダム宣言で天皇は「subject to」された。その後、憲法を作れという命令が下り、草

案まで押しつけられた。それを新憲法にするために「憲法草案委員会」というものが作られたが、九九パーセントは占領軍の原案を翻訳するのが仕事だった。日本の委員たちが草案を作ったわけではない。

そして天皇陛下は占領軍統治下だから被脅迫状況にあった。したがって憲法上諭に正統性はないと言える。なにしろ連合軍総司令官に「隷属して」^{subjugated}「おられたわけだから」。

「朕は、日本国民の総意に基いて、新日本建設の礎が、定まるに至つたことを、深くよろこび、樞密顧問の諮詢^{しじゆん}及び帝国憲法第七十三条による帝国議会の議決を経た帝国憲法の改正を裁可し、ここにこれを公布せしめる」

上諭にはこうあるが、日本国民の総意に基づいてなどいえないことは明白である。占領下には「プレスコード」があつたから情報が漏れるわけがなく、いわんや憲法草案の批判などできるはずがない。だから天皇陛下は嘘を言わされたことになる。

この状況をどう説明すればよいか。

「条約憲法」という概念がある。日本が連合軍の占領下にあり、天皇陛下も連合軍総司令官に隷属されていたということは、つまり、日本政府そのものが連合軍に隷属していたのである。その中で新憲法を作つたということは、これは占領軍とのポツダム宣言に基づく条約だと考えられる。

言い換えれば、日本国憲法は条約憲法で、ふつうの憲法ではない。正確に言えば、占領

政策基本法ということになるだろう。

条約憲法だから、条約の終結時、つまり独立回復時に、日本政府は日本国憲法を失効とし、主権の発動たる憲法、つまり普通の憲法の制定か、明治憲法に復帰を宣言し、それと同時に、その手続きに基づき明治憲法の改正をしなければならなかった。まして、占領軍の作つた下書きに基づいて作らされた日本国憲法をずるずると崇め、またそれを改正していくということをするべきではないのである。

フランスはドイツに占領されビシー政権（注1）になつた経験があるから、国土の一部、および全部が占領されている時は憲法を改正してはいけないことになっている。そしてドゴールが政権を取つた時、ビシー政権で制定されたことはすべてなかったことにした。

今、日本国憲法を改正しようという議論があるが、これは必ず後で傷となる。素人の私にも気がつくことに、将来の憲法学者が気づかないわけがない。主権のない時代に作られた憲法を改正したりしたら、独立後の日本人がその憲法に正統性^{レジテマシー}を与えたことになるという議論が後に必ず起こる。

もちろん、新しく作る憲法の中身は現日本国憲法と同じでもいい。しかし、今の憲法は一度失効させねばならない。

憲法第九十六条の改正条項について、日本は何年間も議論を続けている。占領軍が全体を十日足らずで作つたものであるにもかかわらず、改正条項だけで日本をあげて何年も議

論しているのである。滑稽極まりない。

なぜ滑稽か。インチキだからだ。筋が通っていないから滑稽なのである。

以前、政治評論家の竹村健一氏が「世界の常識は日本の非常識、日本の常識は世界の非常識」と言った。それについては、ほとんどの外国人が頷いている。

なるほど、戦後の「日本の常識は世界の非常識」だが、戦前の日本はそう言われたらどうか。そんなことはない。日本は明治以来、日本の常識を世界の常識に合わせる努力をしてきた。明治憲法もそれを目指したものだ。明治以後の日本のスタンダードは間違いなく世界のスタンダードだったのである。

ところが、「占領政策基本法」である日本国憲法を本物の憲法だというようなインチキな主張をたてにとると、すべてがおかしくなる。何かにつけて「日本の常識は世界の非常識」になったわけである。

日本国憲法前文には、「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであつて、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」(傍点渡部)と記されている。

たとえば、モナコがフランスに安全を委ねる(ゆだ)ように、小さな国が大きな国と同盟を結ぶ時に安全を委ねるということはあるだろう。しかし、他国を信頼して生存を委ねるなどという馬鹿な国はない。国民を生かすも殺すも他国に委ねるというこの部分だけを読んでも、

「これは憲法ではありません」と言っているに等しい。

しかも我々の周囲の国を見よ。ソ連は戦争が終わってから何十万人もの日本人を拉致し、何万人も餓死・凍死させた国だ。北朝鮮は世襲の独裁国、韓国は日韓基本条約も守れない国、中国は自国民を数千万人も虐殺し、しかもチベットやウイグルを侵略し残虐行為を続けている国だ。

アメリカだってポツダム宣言を無視して、日本が無条件降伏したことにした国だ。そういう国々に日本人が自分の安全と生命を信頼して預けようというのか。そんな憲法があるわけではない。

(注1) ビシー政権

一九四〇年(昭和十五)、ナチス・ドイツの攻撃を受けて敗北したフランスが、前内閣の副首相、ペタン元帥を首班として中部の都市ビシーにおいた政権。ドイツの支配力が強く、かつ親ドイツ的だったためレジスタンス勢力との内戦を招き、四四年、連合国によるフランス解放とともに政府は消滅。関係者は処罰された。

第九条は宗教として考えよ

日本国憲法の中でも、とりわけ第九条は神聖視されている。日本が終戦以来、六十年以